

# 児童が教師に対して抱く愛着と親子間の愛着との関連

古市 悦子・堀井 俊章

**Relationship between children's attachment to teachers and to parents**

**Etsuko FURUICHI and Toshiaki HORII**

## 問 題

国民生活基礎調査（厚生労働省大臣官房統計情報部，2013）における世帯構造の年次推移によると、「ひとり親と未婚の子のみの世帯」の割合が増大し全世帯のうち 7.2% を占め，一方「三世代世帯」の割合が減少し 6.6% となっている。すなわち，近年は三世代世帯よりもひとり親世帯が多いという状況にある。青少年白書（内閣府，2007）によると，労働時間の長期化に伴い，平日の親子の接触時間が減少傾向にある。平日に子どもと過ごす時間が「ほとんどない」と答える父親が 1999 年には 14.1% であったが，2005 年では 23.3% に増大し，母親においても同様の傾向が見られる。これらの報告から，親子のかかわりのあり方には時代的な変化が見られると推察される。

教育相談等に関する調査研究協力者会議の報告書（文部科学省，2007）では，「現代社会の変容の中で，家庭の教育力や地域の機能が低下するとともに，児童生徒の抱える問題が多様化し，深刻化する傾向も見られる。こうした様々な問題に対して，学校が対応しなければならない状況になっている」と指摘されている。児童が抱える問題に対応するために，教師は家庭の問題を背景とした児童の特性を深く理解することが重要である。このような児童の特性を規定する要因の一つとして，後述する「内的作業モデル」が存在する。近年，親と接する時間が少ない子どもたちにとって，安定した内的作業モデルを形成することが困難になりつつあり，児童の諸問題に少なからず影響を与えていると推察される。

## 愛着と内的作業モデル

Bowlby（1969 黒田他訳 1976）は発達初期に母親との間に形成される愛着関係が，子どもの健全な発達に最も重要な要素であるとする愛着理論を提唱している。Bowlby（1979 作田訳 1981）によると，愛着は「強い情緒的結びつきを特定の相手に対して起こすという人間の傾向」と定義される。また，愛着対象への愛着行動は「近接性の維持」「分離不安」「安全な避難場所」「安全基地」という 4 つの観点から説明されている。「近接性の維持」とは，恐怖刺激にさらされたときに，個人が愛着対象のそばにいようとする傾向を言う。「分離不安」は，愛着対象からの分離によって体験する正常な不安あるいは恐怖のことである。「安全な避難場所」は，不安や危険な状況において

愛着対象に保護と安心を求める傾向を意味する。「安全基地」は、安全な避難場所であると同時に、そこを拠点に外界に積極的に出ていくための安全地帯とみなす傾向を言う。これらの行動が十分に機能している場合、愛着対象との相互作用は安定していると考えられている(Bowlby, 1969 黒田他訳 1976; 数井・遠藤, 2007; 繁栞・四本, 2013)。

1980年代以前、Bowlbyの愛着理論が日本に定着する前も、日本でも母子関係に関する研究は行われており、そこで扱われていた概念は、愛着に相当するものが含まれている。「児童の親に対する親和性尺度」を作成した森下(1981)は、1970年代に母子関係や親の養育態度に関する研究を行っており、親の養育態度が子どものパーソナリティに与える影響について検討している。その後、親の養育態度に対する子どもの認知を扱った研究を行い、1979年には「子どもの親に対する親和性と親子間の価値観および性格の類似性」を発表し、親和性という概念を用いて親子関係について検討している(森下, 1979)。その研究では、親和性を「愛情的なきずなを強く感じていること」と定義していることからわかるように、親和性は愛着に相当する概念であることがうかがえる。

子どもは親との愛着関係を通して内的作業モデルを形成する。内的作業モデルとは、愛着対象との相互作用の経験を通して内在化される、自分の周りの世界やアタッチメント対象、そして自己に関する心的な表象モデルである(Bowlby, 1969 黒田他訳 1976; Bowlby, 1973 黒田他訳 1977)。つまり、「愛着対象からどのような反応が期待できるのか、自分はどのように受け入れられる存在なのか」という期待や考えなどが、その後の世界や他者とのかかわり方に影響していることを示唆している。親との関係性によって形成される内的作業モデルは、各個人のパーソナリティに大きく影響していると考えられる。

### 児童と教師の間における愛着の可能性

子どもは愛着対象を複数つくと考えられている。Bowlby(1973 黒田他訳 1977)が、愛着は「ゆりかごから墓場まで」と表現しているように、愛着とは生涯発達理論であるとされている。彼は、愛着対象は発達に伴って、両親から友達へ、さらに恋人や配偶者へと移行することを想定している。水本・山根(2011)によると、「母娘関係の発達推移を検討すると、母親との間に安定した愛着を持ち自尊心が高い「密着型」から心理的に分離して「自立型」に移行するという「密着型→自立型経路」が、母親との信頼関係を基盤として心理的に分離していくといった適応的な発達のプロセスを示す」と推察している。子どもにとって母子分離は重要な発達課題であり、愛着対象の移行は発達課題が達成されている結果であるとも考えられる。これまでの先行研究においても発達段階に応じて愛着対象が異なっている。

数井(2005)によると、「小中学校における教師と子どもとの関係では、心理的な安心感を与えることや導き教えるという教育的ガイダンスを与えることなどが、アタッチメントの機能として考えられる」とし、教師が愛着対象となり得る可能性が示唆されている(藤田・森口, 2015)。Hughes & Cavell(1999)は、教師・生徒関係が子どもの

行為問題に及ぼす影響の展望研究において、教師との良好な関係が子どもの態度を変え、親との関係性までも変える可能性があることを示唆する結果を得ている。これほどまでに大きな影響を与える教師が、愛着対象にならないとは考え難く、主要愛着人物である親が不在である学校環境において、二次的愛着人物として捉えられる教師に愛着を形成する可能性は十分あると考えられる。

### **親子関係と教師子ども関係の関連**

子どもと教師の関係性については、親との愛着や内的作業モデルに関連していることが示唆されている。中井・庄司(2007)は「生徒の教師に対する信頼感には、幼少期の両親に対する愛着といった生徒の心理的な要因も関連していることが明らかになった」と報告している。ここでいう信頼感は愛着の一側面と考えられ、子どもの親に対する愛着は子どもと教師の愛着関係に影響することが予想される。

### **愛着測定に残された課題**

藤田・森口(2015)は児童期における教師に対する愛着について検討するために教師に対する愛着尺度を作成している。その尺度は本多(2002)が作成した児童の「母親に対する愛着」測定尺度をもとに作成され、「母親とのかかわりを教師とのかかわりに置き換えることに、多少無理があるものもある」と述べ、尺度としての課題が指摘されている。

## **目 的**

本研究では、アタッチメントの定義である「人が特定の他者との間に築く緊密な情緒的結びつき」(遠藤, 2005)を愛着の定義とする。その上で、児童は親を主要愛着人物、教師を二次的愛着人物として愛着を形成し、「親に対する主要愛着と教師に対する二次的愛着は発達に伴って変化する」という仮説と、「親に対する主要愛着は教師に対する二次的愛着と関係を示す」という仮説を検討することを目的とする。

## **予 備 調 査**

### **目的**

児童の教師に対する愛着行動場面を把握し、カテゴリー化をした結果に基づき、本調査で用いる児童の教師アタッチメント尺度項目を構成することを目的とする。

### **方法**

**調査協力者および調査時期** 首都圏の公立 A 小学校の小学校教員 14 名(男性 7 名, 女性 6 名, 無記入 1 名, 平均教員歴 12.5 年( $SD=10.92$ ))を対象に, 2015 年 9 月 29 日~10 月 2 日に実施した。

なお, 調査協力者を児童ではなく教員としたのは, 児童(特に小学校低学年と中学年)では教師に対する愛着行動を言語化して表出することが困難であると考えられた

ため、児童の愛着対象と考えられる教師側に調査を行うことにした。

**手続き** 調査対象校に質問紙を持参し、教員に調査の趣旨および倫理的な配慮に関して文書と口頭で十分に説明し、合意を得た教員を対象に質問紙調査を実施した。調査は個別・無記名式であり、調査時間は約5分であった。

### 質問紙の構成

1. **フェイスシート** 教員歴と性別について記入を求めた。
2. **「愛着」の定義とその経験の有無** 「愛着」の定義である「人が特定の他者との間に築く緊密な情緒的結びつき」を示した上で、児童から「愛着」を抱かれていると感じた経験の有無と、担任を持ったことのある学年を尋ねた。
3. **児童から愛着を感じた場面についての自由記述** 学校生活の中で児童から愛着を抱かれていると感じた場面についての自由記述回答と、その回想対象となった児童の学年の記入を求めた。

### 結果と考察

学校生活の中で児童から愛着を抱かれていると感じた場面についての自由記述回答の結果を整理し、50項目が抽出された。さらに先行研究を参考に作成した28項目を加え、全部で78項目を用意した。心理学を専攻する大学生3名でKJ法(川喜田, 1967)を援用し、カテゴリー分類を行った。その結果、「信頼性」「親密性」「学校的機能」の三つのカテゴリーに分類された。

「信頼性」は児童が教師を信じて頼りにしている様子を表す。「親密性」は児童と教師の身体的・精神的距離が近い様子を表す。「学校的機能」は挨拶や気持ちの表明など、学校において日常的に起こり得る行動内容を表す。

これらを参考に、心理学を専攻する大学生4名、小学校教員1名、大学教員1名でワーディング処理を施し項目化を行い、内容的妥当性を検討した。その結果、「信頼性」カテゴリーは10項目、「親密性」カテゴリーは8項目、「学校的機能」カテゴリーは10項目の計28項目が適正な項目として抽出された。

## 本 調 査

### 目的

「親に対する主要愛着と教師に対する二次的愛着は発達に伴って変化する」という仮説と、「親に対する主要愛着は教師に対する二次的愛着と関係を示す」という仮説を検討することを目的とする。

### 方法

**調査協力者および調査時期** 首都圏の公立A小学校の2年生101名(男子55名, 女子45名, 無記入1名), 4年生93名(男子51名, 女子42名), 6年生73名(男子39名, 女子32名, 無記入2名)の合計267名を対象とし, 2015年11月24日~12月8日に調査した。

**手続き** 調査対象校に質問紙を持参し、2・4・6年生の各クラスの担任に質問紙調査の実施を依頼した。児童には調査の趣旨および倫理的な配慮に関して文書と口頭で十分に説明し、合意を得た児童を対象に調査を実施した。調査は集団・無記名式であった。実施時間は10～30分であった。

### 質問紙の構成

1. **フェイスシート** 学年と性別について記入を求めた。

2. **児童の家庭における愛着対象について** 児童が家庭生活で一番長い時間一緒に過ごしている大人を5つの選択肢「母親」「父親」「祖母」「祖父」「その他」から一つだけ選ぶよう求めた。

3. **児童の親に対する親和性尺度（森下, 1981）** 森下(1981)による「親和性」という概念は「愛着」に相当すると考えられたため、本尺度は児童の親に対する愛着を測定可能であると判断し採用した。本尺度は全17項目（「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3件法）、3つの下位尺度「親密さ」「同一視欲求」「信頼性」から構成されている。「親密さ」は親からよく理解され気持ちが通じ合っていると捉える傾向を表す。「同一視欲求」は親と自分を重ね合わせ、親との一体感を求める傾向を表す。「信頼性」は親を信頼性の高い人物であると捉える傾向を表す。

なお、児童の多様な家庭環境を配慮し、上記2で選択した家庭内の大人を「おうちの人」として1名を想起させた上で回答を求めた。家庭内の大人である「母親」「父親」以外の「祖母」「祖父」「その他」も父母に準じる親とみなし分析対象に含めた。

4. **児童の教師アタッチメント予備尺度** 予備調査で作成した、児童の教師アタッチメント予備尺度全28項目を使用し、現在の担任を想起させた上で回答を求めた（「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3件法）。

## 結果と考察

### 児童の教師アタッチメント予備尺度の因子分析と信頼性の検討

児童の教師アタッチメント予備尺度について、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。固有値1.0以上と因子の解釈可能性という基準から2因子を抽出し、最終的に2因子10項目が得られた。因子間の相関係数は.66と中程度であった。

第1因子は、「先生とお話しすると安心できますか」「先生の近くにいると安心しますか」などに高い負荷を示した。教師に対して安心感を抱いている内容であり、Bowlby（1969 黒田他訳 1976）が愛着の行動観点として提唱した「安全な避難場所」に相当する内容であると考えられたため、「安全な避難場所」と命名された。

第2因子は、「先生におうちであったできごとを話しますか」「先生にうれしかったことを話しますか」などに高い負荷を示した。親に近い感覚で教師と接し、教師に対して心を開いた行動を取る内容であることから、「安定愛着行動」と命名された。

上記の2因子をもとに2つの下位尺度を構成し、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した結果、「安全な避難場所」（5項目）が.85であり、「安定愛着行動」（5項目）が.76であった。このことから児童の教師アタッチメント尺度は高い信頼性（内的整合性）を備

えていることが確認された。

### 児童の親に対する親和性尺度の信頼性の検討

児童の親に対する親和性尺度の 3 つの下位尺度「親密さ」「同一視欲求」「信頼性」について、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した結果、「親密さ」が .75, 「同一視欲求」が .72, 「信頼性」が .49 であった。「親密さ」と「同一視欲求」は高い信頼性（内的整合性）が確認されたが、「信頼性」については信頼性（内的整合性）が不十分であった（「信頼性」は以降の分析では参考扱いにとどめる）。

### 児童の教師アタッチメント尺度および児童の親に対する親和性尺度の学年差と性差

児童の教師アタッチメント尺度と児童の親に対する親和性尺度の両尺度について、学年別・性別に平均値と標準偏差を算出した (Table 1)。次に、二要因（学年×性）の分散分析を行い、有意な学年差が認められた場合、Tukey 法による多重比較を行った。二要因分散分析の結果を Table 2 に示す。

児童の教師アタッチメント尺度について、「安全な避難場所」と「安定愛着行動」の学年差は、低学年より中学年が、低学年より高学年が、中学年より高学年が、それぞれ有意に低いことが明らかになった。つまり、「安全な避難場所」と「安定愛着行動」はともに学年の上昇に伴い得点が低くなる傾向が示された。性差はともに有意差が認められず、また、交互作用も認められなかった。

山口(2009)は「成長発達に伴って認知的表象が利用できるようになるにつれ、個人は乳幼児期に比べると明確な愛着行動を示さなくなる」と指摘している。この指摘を敷衍して鑑みると、児童は精神発達度が高まるにつれ、愛着を抱いている対象に直接的な愛着にまつわる行動を取らなくなるため、学年の上昇に伴い愛着が弱まると考えられる。特に学校現場では、学年ごとに生活面においても学習面においても達成目標が明確であり、児童は学年が上がるごとにその目標を達成し着実に自立に向かって発達するため、教師に対する愛着が弱まる傾向にあると推察される。

次に、児童の親に対する親和性尺度について、「親密さ」「同一視欲求」「信頼性」の学年差は、低学年より高学年が、中学年より高学年が、それぞれ有意に低いことが明らかになった。したがって、「親密さ」「同一視欲求」「信頼性」はすべてにおいて、高学年が最も得点が低いということが判明した。これは教師に対する愛着行動同様に、精神発達度が高まるにつれ、愛着を抱いている親に対して愛着にまつわる直接的な行動を取らなくなることが要因であると考えられる。

性差については、「親密さ」と「信頼性」において有意差は認められなかったが、「同一視欲求」では有意差が認められ、男子よりも女子の得点が有意に高かった。本調査においては、児童が家庭生活で一番長い時間一緒に過ごしている大人として、8割以上の児童が「母親」を想起して回答していた。母親と同性である女子の方が、同一視欲求が高まったと考えられる。この結果は、森下(1981)の、子どもは異性よりも同性の親への同一視欲求が強く、さらに男児の父親に対する同一視欲求よりも女兒の母親

に対する同一視欲求の方が強いという報告と符合する。なお、「親密さ」「同一視欲求」「信頼性」、それぞれの交互作用は認められなかった。

Table 1 児童の教師アタッチメント尺度と児童の親に対する親和性尺度の平均値および標準偏差

			低学年	中学年	高学年
			<i>M(SD)</i>	<i>M(SD)</i>	<i>M(SD)</i>
児童の教師 アタッチメ ント尺度	安全な避難場所	男	13.93(1.87)	12.47(2.24)	10.21(2.79)
		女	13.97(1.68)	12.69(2.52)	10.16(2.63)
アタッチメ ント尺度	安定愛着行動	男	12.68(2.40)	10.27(2.38)	8.53(2.70)
		女	12.61(2.36)	10.35(2.46)	9.09(2.72)
児童の親に 対する親和 性尺度	親密さ	男	19.14(1.93)	18.55(2.31)	16.84(3.06)
		女	19.74(1.52)	19.07(2.26)	17.31(2.25)
	同一視欲求	男	15.57(2.19)	14.45(2.68)	13.53(2.75)
		女	16.18(2.00)	16.12(1.89)	14.00(2.69)
	信頼性	男	10.71(1.43)	10.74(1.54)	9.93(1.73)
		女	11.33(0.93)	11.16(0.99)	9.91(1.97)

Table 2 児童の教師アタッチメント尺度と児童の親に対する親和性尺度の二要因（学年×性）の分散分析結果

		学年差		性差	交互作用
		<i>F</i>		<i>F</i>	<i>F</i>
児童の教師 アタッチメ ント尺度	安全な避難場所	55.77***	低学年 > 中学年 > 高学年	0.06	0.08
	安定愛着行動	50.44***	低学年 > 中学年 > 高学年	0.38	0.35
児童の親に 対する親和 性尺度	親密さ	23.29***	低学年, 中学年 > 高学年	3.48	0.02
	同一視欲求	16.38***	低学年, 中学年 > 高学年	9.13**	男 < 女 1.56
	信頼性	13.86***	低学年, 中学年 > 高学年	3.41	1.00

\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

### 児童の教師アタッチメント尺度と児童の親に対する親和性尺度の各下位尺度間の相関

児童の教師アタッチメント尺度と児童の親に対する親和性尺度の各下位尺度間の関連を検討するために、相関分析を行った(Table 3)。すべての対において有意な正の相関が認められた。したがって、児童の教師に対する愛着と児童の親に対する愛着は密接な関連にあることが示唆される。

Table 3 児童の教師アタッチメント尺度と児童の親に対する親和性の各下位尺度間の  
相関分析

	安全な 避難場所	安定愛着 行動	親密さ	同一視欲求	信頼性
安全な避難場所	—	.59***	.38***	.41***	.29***
安定愛着行動		—	.25***	.29***	.20**
親密さ			—	.56***	.70***
同一視欲求				—	.54***
信頼性					—

\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

### 児童の教師アタッチメント尺度と児童の親に対する親和性尺度の各下位尺度間の 関係を示す構造モデル

児童の親に対する親和性尺度の下位尺度である「親密さ」「同一視欲求」「信頼性」は、児童の教師アタッチメント尺度の下位尺度「安全な避難場所」「安定愛着行動」と関係を示すという仮説モデルを検討するために、回答者全員を対象とし、共分散構造分析によるパス解析を行った。その結果採択された構造モデルを Figure 1 に示した。パス係数はそれぞれ、「親密さ」から「安全な避難場所」は.16( $p < .01$ ), 「同一視欲求」から「安全な避難場所」は.33( $p < .001$ ), 「同一視欲求」から「安定愛着行動」は.29( $p < .001$ )であった。適合度指標は、 $\chi^2 = 3.63(n.s.)$ , GFI=.994, AGFI=.972, CFI=.999, RMSEA=.029 であり、モデルはデータに十分に適合していることが示された。

Figure 1 を見てわかるように、「親密さ」から「安全な避難場所」へ正の有意なパスが見られた。親との関係性を親密であると捉えている児童は、教師を、自分を守ってくれる安全基地の役割を果たす人物として捉える傾向が示された。すなわち、親からよく理解され、親と気持ちが通じ合っている児童は、教師に対しても親と同じように気持ちを通わせることができる存在であると捉え、教師に安心感を抱く傾向が示唆された。これは Bowlby (1969 黒田他訳 1976 ; 1973 黒田他訳 1977) が提唱した内的作業モデルの概念と一致している。つまり、親と親密な関係を築けている児童は、教師とも同様な関係性を築ける可能性が推察される。

「同一視欲求」から「安全な避難場所」へ正の有意なパスが見られた。親に対して、自分も親のようにありたいと考える児童は、教師を、自分を守ってくれる安全基地の役割を果たす人物であると捉える傾向が示された。森下(1979)は、子どもは温かい愛情の深い、子どもの依存している親に対して同一視が起こりやすいことを指摘している。つまり、同一視欲求が高い児童は、親との安定した絆のある温かい関係を築けており、そのような児童は、教師に安心感を抱きやすい傾向が示唆されたことになる。この結果もまた内的作業モデルの概念と符合する。

「同一視欲求」から「安定愛着行動」へ正の有意なパスが見られた。自分も親のよ



うにありたいと考える児童は、親に近い感覚で教師と接し、教師に対して心を開いた行動を取る傾向にあることが示された。すなわち、親に対して同一視欲求が高く、親と安定した関係を築けている児童は、教師に対しても心を開くことができ、教師に自己開示をしたり、好意を持って接したりする傾向が示された。

なお、多母集団同時分析により、男女間および学年間の構造モデルにおけるパスの大きさの差異について検討を行った結果、いずれも有意差は見られなかった。

以上より、児童の親に対する愛着は教師に対する愛着と密接な関係を示すことが明らかになった。親に対して安定した愛着関係を築くことができている児童は、安定した内的作業モデルを形成しており、教師に対しても親に対する関係と同じような安定したかかわりをもつ可能性が示唆される。

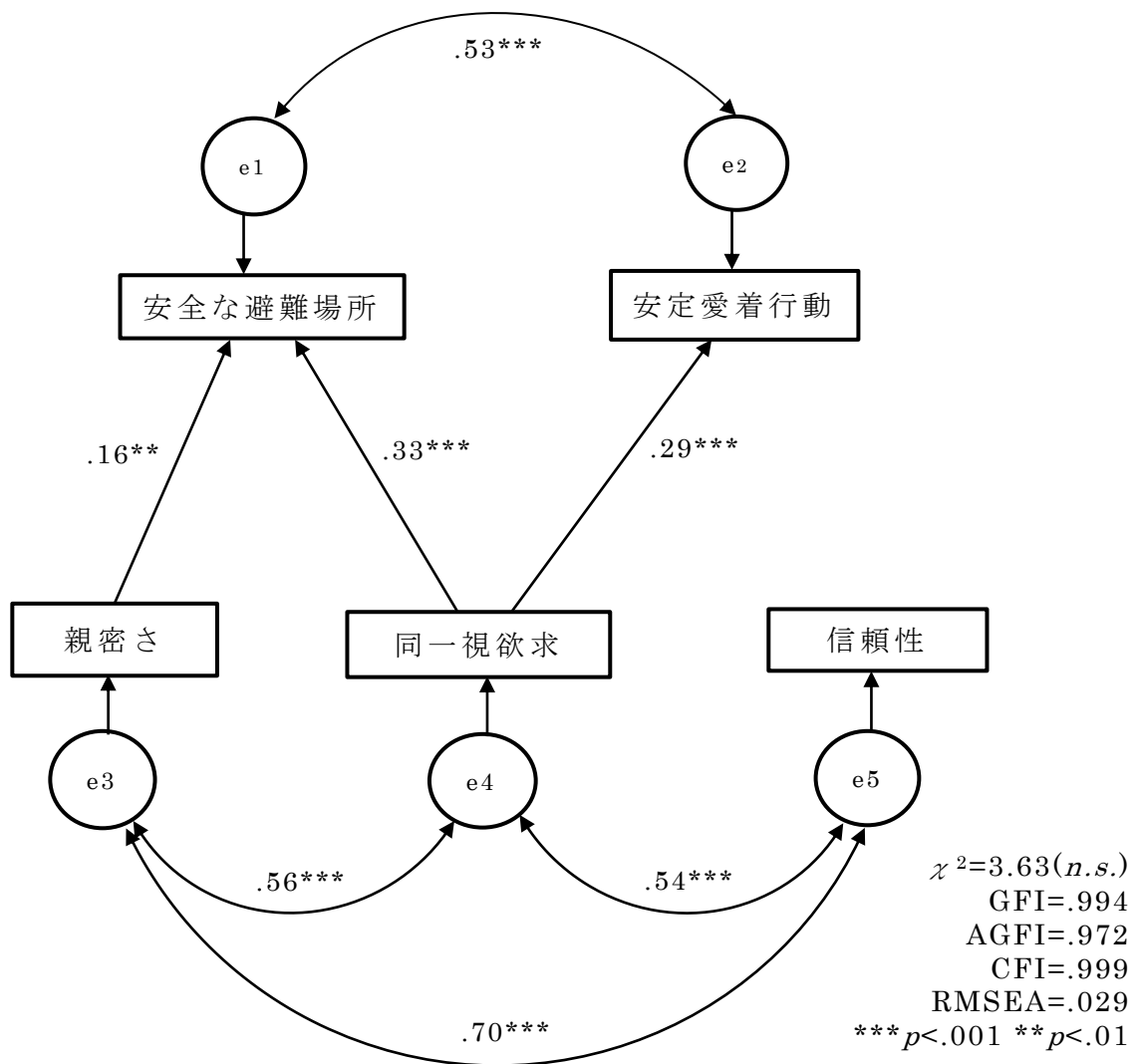


Figure 1 児童の親に対する愛着と教師に対する愛着との関係を示す構造モデル

## まとめと今後の課題

本研究は児童を対象に、教師に対する愛着と親に対する愛着をそれぞれ測定する尺度を実施し、「親に対する主要愛着と教師に対する二次的愛着は発達に伴って変化する」という仮説と、「親に対する主要愛着は教師に対する二次的愛着と関係を示す」という仮説を検討した。その結果、児童の教師および親に対する愛着は、学年の上昇に伴い減少する傾向が示された。本研究は横断研究のため因果関係が解明されたことにはならないが、「親に対する主要愛着と教師に対する二次的愛着は発達に伴って変化する」という仮説を支持する方向性が示された。

また、共分散構造分析によるパス解析を行った結果、親に対して安定した愛着関係を築くことができている児童は、教師に対しても安定した愛着関係を示す傾向が明らかとなった。このことから「親に対する主要愛着は教師に対する二次的愛着と関係を示す」という仮説が支持された。

なお、愛着に関する先行研究（Bowlby, 1969 黒田他訳 1976；数井・遠藤, 2007）を踏まえると、本研究で見出された愛着の因子とは異なる因子が存在することも想定される。今後は尺度項目の収集を拡大し、項目をさらに精選した上で尺度化することによって、愛着の他の因子が抽出され、新たな知見が加わる可能性がある。

また、本研究の結果をもとに逆転の発想を試みると、今後の研究の蓄積次第では、教師は現在の児童との関係性から、児童と親の関係性について推し量れる可能性がある。すなわち、児童が教師と安定した愛着関係を築いているならば、児童は家庭内でも親と安定した愛着関係を築けていることが推察され、逆に、児童が教師と安定した愛着関係を築いていないならば、児童は親と安定した愛着関係を築けていないことが推察される。後者の場合、教師は児童の家庭内での様子に十分注意し、必要に応じてフォローすべきであるというサインを獲得できることになる。教師は児童と自分自身との関係性を的確にアセスメントすることによって、家庭における児童と親との関係性を推し量り、教師として家庭に対して適切にフォローしていくことが期待される。このような実践につながる研究を今後さらに展開していく必要がある。

## 引用文献

- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: vol.1 Attachment*. London: The Hogarth Press. (ボウルビィ, J. 黒田 実郎他 (訳) (1976). 母子関係の理論 (I) 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: vol.2 Separation: Anxiety and anger*. London: The Hogarth Press. (ボウルビィ, J. 黒田 実郎他 (訳) (1977). 母子関係の理論 (II) 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1979). *The making and breaking of affectional bonds*. London: Tavistock Publications. (ボウルビィ, J. 作田 勉 (監訳) (1981). ボウルビィ母子関係入

- 門 星和書店)
- 遠藤 利彦 (2005). アタッチメント理論の基本的枠組み 数井 みゆき・遠藤 利彦 (編). アタッチメント——生涯にわたる絆—— (pp. 1-31) ミネルヴァ書房
- 藤田 亜紀・森口 佑介 (2015). 児童期における教師に対するアタッチメント 上越大学研究紀要, **34**, 111-120.
- 本多 潤子 (2002). 児童の「母親に対する愛着」測定尺度の作成 カウンセリング研究, **35**, 246-255.
- Hughes, J. N. & Cavell, T. A. (1999). Influence of the teacher-student relationship in childhood conduct problems: A prospective study. *Journal of Clinical Child Psychology*, **28**, 173-184. (渡辺 弥生・伊藤 順子・杉村 伸一郎(2008). 原著で学ぶ社会性の発達 ナカニシヤ出版)
- 川喜田 二郎 (1967). 発想法——創造性開発のために—— 中央公論社
- 数井 みゆき (2005). 保育者と教師に対するアタッチメント 数井 みゆき・遠藤 利彦 (編). アタッチメント——生涯にわたる絆—— (pp. 114-126) ミネルヴァ書房
- 数井 みゆき・遠藤 利彦 (2007). アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 (2013). グラフで見る世帯の状況——国民生活基礎調査(平成25年)の結果から—— Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/20-21-h25.pdf> (2016年1月18日)
- 水本 深喜・山根 律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係——「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討—— 教育心理学研究, **59**, 462-473.
- 文部科学省 (2007). 児童生徒の教育相談の充実について——生き生きとした子どもを育てる相談体制づくり(報告)—— Retrieved from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/066/gaiyou/1369810.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/066/gaiyou/1369810.htm) (2016年9月30日)
- 森下 正康 (1979). 子どもの親に対する親和性と親子間の価値観および性格の類似性 心理学研究, **50**, 145-152.
- 森下 正康 (1981). 児童の親に対する親和性の因子構造と尺度の作成 和歌山心理学研究会(藤田紹憲先生退官記念誌), 57-72.
- 内閣府 (2007). 平成20年版青少年白書 特集 家庭, 地域の変容と子どもへの影響 Retrieved from [http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h20honpenhtml/html/toku\\_2\\_1.html](http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h20honpenhtml/html/toku_2_1.html) (2016年1月19日)
- 中井 大介・庄司 一子 (2007). 中学生の教師に対する信頼感と幼少期の父親および母親への愛着との関連 パーソナリティ研究, **15**, 323-334.
- 繁枿 算男・四本 裕子(監訳) (2013). APA心理学大辞典 培風館
- 山口 正寛 (2009). 愛着機能尺度(Attachment-Function Scale)作成の試み パーソナリティ研究, **17**, 157-167.